

マロリーからの警鐘

二十世紀の登山史の中で最大のナゾと残されているのが、一九二四年六月、エベレストの初登頂を目指して消息をたった登山家マロリーが、山頂に立ったか否かである。その鍵を握っていたのがライカカメラとマロリーがどこに眠っているかであった。その遺体が七五年ぶりにエベレスト北面の標高八〇〇〇^{ft}付近で調査隊によって発見された。

その写真が公開されたが、マロリーの遺体は傾斜した広い斜面にうつ伏せとなり、全身がそのまま残り大理石の彫像のような姿で見つかった。四分の三世紀という悠久な時がたった遺体とは決して見えない神々しい新鮮さで、ごく最近雪の中からヒョッコリ姿を現わしたようであった。

エベレストの八〇〇〇^{ft}の高さでは、夏でも氷点下であり乾燥した厳寒の世界で腐敗は進まない。しかしながら、もし強い紫外線と猛烈な風に曝され続け、落石と雪崩れが続くスノーテラスの三〇度の急な斜面に露出され続けていたら、こんな状態で七五年も残っていないなかっただろう。

一九九〇年台に入って地球全体の平均気温の上昇は著しく、歴代一位の記録更新ラッシュの高温続き、九〇年台は過去二〇〇〇年でみても最も高温だったと二〇年

間となった。二酸化炭酸の過剰放出による温室効果によって地球温暖化が進み、シベリヤの永久凍土が解けだし古い地層からマンモスが掘り出されている。ヨーロッパでもヒマラヤの氷河の末端も解けてどんどん後退している。

とりわけ、九〇年は最も高温であり、九九年も高温傾向が続いた。そのさ中の発見である。マロリー・アービン調査隊の記録を読むと、途中での雪の少なさに驚き、発見された北斜面の雪が非常に少なかったと書かれている。九〇年台に入っての暦年の高温でマロリーを覆い隠していた雪が解けてしまったのではないだろうか。

マロリー自身は本当のところ、ヒマラヤの懐ろ深く静かな雪の中で永遠の眠りについていたかったのだろう。しかしながら一九〇〇年台最後の年に姿を現わしたのは、地球温暖化の急速な進行を心配したマロリーが、身をもつて環境悪化に警鐘を鳴らすためだったのではなからうか。∞mの山頂に立ったか否かは、ライカが発見されなかったことからナゾのまま残った。だが頂上に置かれるはずだった妻の写真が、残されたメモや手紙の中からは発見されなかった。

(村松照男)